

水族館でフンボルトペンギンと詩人の目と目が合ったその瞬間、この詩集は生まれたのです。時間と空間を自由奔放に駆け巡る詩的世界が展開され、何かまた新しいことが始まることを予感させます。「フンボルトペンギンの決意」とは詩人の決意でもあるのです。

（誌面サンプル）

1. 作者より

私は厳島神社を観た後、あまりの暑さに死にそうになっていた。どこか暑さをしのげるところはないかと、川沿いの道をふらついていたら、「宮島水族館」という行き先案内板を見付けた。水族館なら涼しいに違いないと思い、その表示板が指し示す方向へ歩いて行った。そして、そのペンギンと出会ったのである。

（中略）

一羽のフンボルトペンギンが、岩場で逡巡していた。何か悩みでもあるのか、なかなか水に飛び込まないのである。岩場の端に立って、首を前に突き出して前傾姿勢になり、水に飛び込もうとするのだが、十数秒ほど水面を見つめ続けると、そのまま止めてしまう。それを何回か繰り返す。ついには岩場を移動して、あくまでも飛び込もうとする前向きな姿勢を見せるのだが、結局また止めてしまうのだ。その何回目かに、フンボルトペンギンは顔を見上げた。そして、私と目が合った。

ついに意を決したのか、フンボルトペンギンは水に頭から飛び込んだ。小さな水しぶきがあがった。水に潜ったかと思うと、浮かびあがってきて、何事もなかったかのように泳いで見せた。そして、ひと泳ぎ済ませると、岩場に上がり、ひょこひょこと歩いて行った。

私は、このフンボルトペンギンのことを、是非詩に書いてみたいと思った。題名も決めた。「フンボルトペンギンの決意」と。このようにして詩集は出来上がったのである。

（『あとがき』抜粋）

2. 詩の一部紹介

夜空でつくったマントに
自分だけの星を配置し終わったら
賑やかに船出しよう
我らの祖先が
故郷の地アフリカを出立し
遥かユーラシア大陸を踏破し
マンモスと太陽を追って氷原を南へ下り
列島の南端に至り
何代にもわたって
棲みついた土地にも飽き足らず
筏に帆を張り
陽の降り注ぐ砂浜から
掛け声もろとも
漂泊の旅に向かったように

積み荷は
もつれた時間の束だけ
悔恨で湿ったシャツと
袖口の割れたボタンはそのままに
おのがじし
星座煌くマントをはためかせ
心は

裸形のモンゴロイドとして
波立つ舳先に立ち
瞬きもせず
ただ腕組みして
フンボルト海流よりもまだ暗い
海原をゆく

(『裸形のモンゴロイド』全文)

春の終わり
扇風機を出してストーブを仕舞う
また夏か
秋の終わり
扇風機を仕舞ってストーブを出す
またすぐ夏が来る

気がつく
いつも季節は過ぎている
人間は繰り返しの動物だ
たまには
冬まで待ってもいいだろう

イングランドの草むした丘陵で
環になった巨大な石の列が
立ちつくしていた
数えきれないほどの夏至と冬至を
蓄積しているのか
その石柱の中に

墳丘の広場では
首飾りをした兵士の埴輪が
馬をひいて退場し
泣きはらしたような眼をして
鎧をまとった兵士や
合掌をした土偶たちが
立ち上がって踊り始める

影は
冬が来る前に
新しい光の通路を準備せよ
夕焼けは
夏が来る前に
約束をひとつ置いて行け

ストーブを点検する
フィルターに詰まった埃を取り除く
扇風機を段ボール箱から取り出して
組み立てる
夏が来る
追憶は忘却よりも素早く
記憶を更新せよ

(『扇風機とストーブ』全文)

問題は
記憶の保存場所ではない
どのように思い出すかだ
姑息なやつらばかりが得をしやがる
と憤慨する君よ
希望ははぐらかされるばかりだ
と嘆く君よ
夢の目次は
できるだけ長めのものを
準備して欲しい
本文に移る頃には
この世界が崩れ落ちているほどに

もう夢なんかないさ？
ならば
水族館へ行って
フンボルトペンギンが
どれだけ時間をかけて
水に飛び込む決意をするのか
自分の目で確かめてくるとよい

(『フンボルトペンギンの決意』抜粋)

桃園荘の二階で
ビートルズばかり聞いていた
晴れた日は格別だった

「キリストはいなかったって？
どうでもいいよ、そんなこと」
君はそう言って部屋を出て行った
窓から差し込む日ざしが
午後の方に影を伸ばし始めていた
本当に言いたかったことは
その先だったのに
君はもういなかった
私はまるで
抽斗(ひきだし)の中に置かれた
ギデオンバイブルのように
部屋にひとり取り残された

通天閣が見える商店街の路上で
私は君をずいぶん待っていた
やがてやってきた君は
私の顔を見るなり
電車で酔って吐きそうになった
と言って道端にしゃがみ込み
そのまま帰っていった
またいつでも会えるさ
と思っているうちに
永久に会えなくなった

宿命はあった
それが過去に抗うものならば

本当に言いたかったことは
何だったのか
もう忘れてしまった

桃園荘の二階で
ビートルズばかり聞いていた
君とは毎日のように会っていた
グッデイ サンシャイン！
空が青くなければ
人生はいくぶん
つらいものになっていただろう

(『トゥ・オブ・アス』全文)